旅・いろいろ地球人

「南太平洋に住む客家」　　河合洋尚（国立民族学博物館准教授）

（1）　客家の故郷・中国広東省　2020 年 2 月 1 日刊行

中国には 56 の民族があるが、その 90%以上を占めるのが漢族である。中国本土だけで 12 億人を超えるだけあって、漢族の言語や文化は実に多様だ。私たちが通常見聞きする中国語は、標準語（共通語）である。中国には、その他、上海語、広東語などのさまざまな「方言」がある。

中国の「方言」はまるで外国語である。中国語と「方言」、そして「方言」同士は、一般的に意思疎通ができない。私が 2003 年から約 7 年間暮らした東南部の広東省では、広東語、潮州語、客家語の「三大方言」がある。当時の広東省には、中国語を上手に話すことができないお年寄りが多く、大学に入るまで中国語を話したことがない若者すらいた。

客家語を話す人々は、客家と呼ばれる。特に 17 世紀以降、客家は、広東省から中国南部各地、さらには世界各地へと移住した。南半球の各地、例えば南太平洋の島々にも客家が暮らしている。そのうち、客家が最も集中するのが、フランスの海外領土であるタヒチとニューカレドニアである。特にタヒチ（正式名称・フランス領ポリネシア）では、現地の経済や行政に強い影響力をもつ客家が少なくない。また、タヒチの離島・ライアテアの中心街では、客家が集まって暮らしている。ここでは実質的に客家が経済的な実権を握っている。

客家文化のシンボル・円形土楼。ただし南太平洋にはこの建築がない＝中国・広東省で 2017 年 10 月、筆者撮影

（2）　タヒチの春節と元宵節　2020 年 2 月 8 日刊行

タヒチという地名を聞いて日本でイメージされがちなのは、真珠、ハネムーン、ゴーギャン、楽園であろう。中国人を思い浮かべる人はそう多くないはずだ。だが、実際にタヒチへ行くと、中国系の顔をした人々や、中国語の看板を掲げた建物をよく見かける。タヒチではアジア系で最も多いのが中国人、特に中国広東省から移住した客家である。

私が初めてタヒチを訪れたのは、2017 年 2 月である。中国の春節（旧正月）にあたる期間であった。春節期間中、中心都市パペーテの中央市場では、中国風の飾りつけがなされる。そこに足を踏み入れると、チャイナタウンにいるような気分になる。パペーテや郊外の街でも、銅鑼や太鼓の音が鳴り響き、あちこちで獅子舞が催される。客家や他の中国系住民だけでなく、現地在住のポリネシア人やフランス人なども獅子舞に参加し、中国の祝日を祝う。

旧暦 1 月 15 日の元宵節は、春節より盛大な祭りが催される。この日は日が暮れると多くの人々が、パペーテの関帝廟に集まる。そして、客家を中心とする人々が、歌や踊りを 20 演目ほど、披露する。中国広東省でも、元宵節になると派手な祭りが催される。タヒチの客家は、遠い南国の島に来ても、祖先から伝わる祭りを大切にしているのである。

チャイナドレスを着て春節を祝うポリネシア系の少女（手前）＝2018 年 2 月、筆者撮影

（3）　タヒチ客家の「中国人」意識　2020 年 2 月 15 日刊行

タヒチの中国系移民の歴史は古い。19 世紀半ば、綿花栽培のプランテーション労働者として、中国広東省から数多くの移民が到着した。だが、いまタヒチで客家を名乗る中国人の祖先の大多数は、20 世紀前半に広東省から移住している。

タヒチの客家は、すでに移民 3 世や 4 世となっている。彼らは、現地在住のポリネシア人やフランス人と同じ学校に通い、フランス語を母語としている。大半の青少年層は客家語や中国語を流暢に話せず、漢字を読むこともほとんどできない。

30 歳代のＬさんも、そうした客家の一人である。かつて彼は、中国で起業しようと、祖父の故郷である広東省に戻ったことがある。だが、言葉も習慣も異なるため、中国本土の中国人から「外国人」扱いされ、苦労したという。結局、自分は中国本土の中国人とは違うと悟り、タヒチに戻った。

タヒチの客家は、中国本土の人々と接触することで、逆にポリネシアン・チャイニーズとしての自己意識を高めているようだ。春節や元宵節のようなハレの日には中国人としての祭日を過ごす一方、客家によるポリネシアン・ダンスの演目を故意に入れる。それにより、タヒチの客家文化が、ポリネシア文化との融合の産物であることを強調するのだ。

元宵節のポリネシアン・ダンス。客家女性らがポリネシア風とされる衣装を着て踊る＝2017 年 2 月、筆者撮影

（4）　ニューカレドニアへの再移住　2020 年 2 月 22 日刊行

タヒチと同じく、ニューカレドニアも観光やハネムーンで有名な南国の「楽園」である。中心都市ヌーメアでは日本人のカップルやグループが歩く姿をよくみかける。ヌーメアで店を開いている人々もアジア系が多い。その多くはベトナム人である。

ニューカレドニアのアジア系移民のなかでは、ベトナム人やインドネシア人が相対的に多い。ここでは、中国人はアジア系移民のなかでも少数者だ。

ニューカレドニアでは、1940 年代まで中国系移民がほとんど住んでいなかった。だが、60 年前後にタヒチから客家が集団で移住した。今は中国本土から移住した客家や雲南人などがいる。注目に値するのは、ニューカレドニアでは、ベトナムから再移住した中国系移民が少なくないことである。

60 歳代のＨさんは、ヌーメアに住むベトナム系の客家である。彼の祖父が中国広東省からベトナム南部へ移住したことから、ホーチミンで生まれ育った。だが、ベトナムで中国人排斥の運動が高まったため、80 年代に両親や弟、妹たちとニューカレドニアへ再移住した。Ｈさんの妻もベトナム出身の中国系移民である。Ｈさん一家は、ベトナムと中国の双方の文化に親しんだニューカレドニア人として生きている。

ヌーメアのアジア人街。アジア人街とその付近には客家が経営する店舗がある＝2018 年 9 月、筆者撮影

（5）　ニューカレドニアの「客家文化」　2020 年 2 月 29 日刊行

ニューカレドニアでは、ベトナム文化と中国文化の境が曖昧である。

ヌーメアで客家が経営する大きな雑貨店に入ってみた。ニューカレドニアでは珍しく中国風の装飾品や祖先祭祀用品が売られている。だが、これらを購入するのは、中国系移民だけでない。ベトナム系移民もそれらを購入し、使用するのだという。

食文化も同様である。ヌーメアの中国料理店に入ってメニューを見ると、必ずと言っていいほど、フォーやネムなどのベトナム料理がそれに含まれている。逆に、ベトナム料理店のメニューに、中国由来の料理が記載されることも珍しくない。

他方で、ニューカレドニアの中国系移民の間では、タヒチの客家が持ち込んだ文化も浸透している。マア・ティニトはその一例である。このタヒチ語を直訳すれば「中国料理」である。パスタのうえに豚肉、小豆などがかけてある。その名に反して中国で見かけることはまずない。

2000 年代に入ってから広東省より移住したＦさんは、ヌーメアで中国料理店を開いた。客家である彼は、故郷の広東省で「本場の味」とされている客家料理を、当地で出した。だが、その客家料理は、地元の客家にすら受け入れられなかった。ニューカレドニアの客家は、多種多様に混じりあった文化を、すでに受け入れていたのである。

タヒチの客家が持ち込んだマア・ティニト（MAA TINOTO）。フォークで食べる。2019 年 9 月、筆者撮影